

句集

花合歡

石塚  
有香



每日句会入選句

冬の磴パワースポットとは知らず  
体験の子が持ち帰る今年米  
山からの風に顔上ぐ草刈女  
青空を貫かんとす秋燕  
万緑のまつ只中に妻籠宿

田仕舞の煙隠れに一両車

短日や呼ぶまでもなく猫帰る

師の句碑を訪ね寺苑の秋を聞く

日盛りの揚羽入りくる深庇

山辺より駈け降りてくる稲穂波

深山寺鈴の緒振れば音涼し

白南風に嬰の干し物泳ぐ竿

と見る間に青田となりて風渡る

東天に赤き火星や涼み台

一声の後の沈黙牛蛙

子らの声広場に溢れつばめくる

山寺にひびく瀬音や梅日和

山笑ふ大吊橋の揺れに揺れ

踏青や百円野菜買ひもして

大とんど四隅の樽に鎮め水

藍残る薄暮の空や春きざす

風花やひしめきあへる船溜り

黄落を蹴散らし駈くる走者かな

と見る間に峡の一村霧隠れ

田仕舞ひの煙狼煙のごと上る



緋毛氎床几にぎあふ菊花展

路地裏の隅々照らす十三夜

日向ぼこ百面相の吾子飽きず

太極拳スローモーション秋天下

隠し持つ吾子敬老のプレゼント

秋の雲ヒマラヤ杉の高空に  
行き合ひて傘傾ける萩の雨  
啄木鳥や刻印著き力石  
月涼し家出の猫の歸りきし  
バス停の人も黙禱終戦日

髪上げてうなじ艶めく浴衣かな  
盆踊り連太鼓うち始まりぬ  
川遊び弁当箱にメダカの子  
出漁の水脈キラキラと夏兆す  
尺取の歩み眠気を誘ひけり

鐘一打間遠に響く朧かな

囀りの天洩るがごとき一樹あり

川幅を狭めてミモザなだれ咲く

靴跡の大中小や青き踏む

一杓を水子へ注ぐ涅槃寺

焼き芋屋湯気が私を誘惑す

息白く揃ひ集団登校す

老木の寒肥は根より離しやる

春の水吐き出す手押しポンプかな

父の手に包まれ風の糸を引く

夕日影線描画めく冬木立  
元氣よく吾子等の御慶玄関に  
凍空を睨みし鋭目や義士の像  
着ぶくれて街頭に立つ見守隊  
飛び交ひてひよ騒がしき甌岩

石蹴りに興ず路地裏一葉忌

堀り上げし芋に万歳する園児

秋冷の堂に黙して座禅組む

吾子をかし紫苑に寄りて背くらべ

小流れの山路をゆけば初紅葉

あるばしの風にコスモス揺れやまず

稔り田をかけ巡りをる里の風

日に映えて艶増しにける実むらさき

石仏尾花の丈に埋もれけり

有り無しの風に大袈裟竹の春



待宵や下駄音ひびく石畳  
万燈会光りの帯といひつべし  
みそつ齒の笑顔土産に帰省かな  
新涼に聞き耳立てて猫眠る  
月涼し先ゆく吾の影もまた

青田中村の亭午は無音界  
谷渡る風に機嫌や合歡の花  
暮るるまで少し間のあり合歡の花  
時鳥ないて家路へ急かせけり  
一両車広き植田を走るごと

藤房に遊ぶ風あり峡夕べ

小繕ひして雛調度納めけり

鞆を漕ひでは山を引き寄せる

雷神といへど童顔草萌ゆる

囀りや片言ふえし子とあそぶ

啓蟄の土蹴散らして逆上がり

竹筒に勢揃ひせし豆雛

春水のほとばしり出る笥かな

磊々に奏でそめたる春の水

遮断機の研す峡の余寒かな

蒼天へ背伸びするごと冬木立  
万歩計見せ合ひもして町小春  
逃げ出して戻らぬ猫や日脚伸ぶ  
山粧ふ埴輪の巫女は目を細め  
白き息はずませママを呼びに來し

玉の日に庭の山茶花散りこぼれ

黄落の旧居留地をたもとほる

七五三パパは専属カメラマン

庭の柚子ほめれば一つお土産に

爪立てて柚子の香をうべなひぬ

藪の中落葉に沈む一羅漢  
瞬くは谷戸の底ひの冬灯  
鐘楼を抱きて法の山粧ふ  
野良猫の声のか細く秋風裡  
身に入むや橋詰め立つ水難碑

口開けし通草をさげて句座の友  
かくれんぼ秋夕焼けに散らばりて  
逃げ足は疾風のごとし稲雀  
父母の遺影も並べ月愛でる  
台風一過中天の月円かなり



海風ぎて秋日に金紙揉むごとし  
大剪定されて秋空ひらけけり  
雷火一閃待望の雨来たりけり  
実り田の畦に傾く石仏  
望の月蕞の波を濡らしけり

写経会の耳に間遠の牛蛙

家中を走つて閉める夕立急

雲の峰ジャングルジムに立ちにけり

蝉時雨浴びゆく峡の奈落径

先客の猫に隣りて夕端居

ダムに添ふ迂回路合歡の花盛り

緑陰をトラツクが占む亭午かな

逆上がりできますように星祭る

全開の本堂涼し忌を修す

数珠なして畦ゆく子らや青田風

高欄を吹きぬけてゆく青葉風

植え終えし棚田に峡の風生る

堂縁を覗けばここだ蟻地獄

竹筒に百円落とし春菜買ふ

古い母の苞にと畦の土筆摘む

語り継ぐ民話の里や花馬酔木  
菜箸の焦げるは宜と目刺し焼く  
大荒れの春北風バイクなぎ倒す  
どことなく母似と思ふ雛の顔  
存問に似し啓蟄の庭手入れ

蒼天に鳶放ちたる雪野原

啓蟄の畑に林立もぐら除け

帰宅せし吾子後ろ手に愛のチョコ

冴え冴えとご詠歌の声澄めりけり

高鼻のマスク美人といひつべし

寒天干す雫の刻む音幽か  
炭小屋の主に匂帳覗かるる  
一願をこめて地蔵に寒の水  
鎖されたるケーブルのりば山眠る  
寒林を縫ひつつ消ゆる郵便車

竹はぜて飾り宙舞ふどんどこかな

七草に満たねど至福二人粥

炭焼きの匂ひに満ちて里暮るる

年用意縫ふよりほどく針仕事

懐に古墳を抱き山眠る



読み聞かせるたる子眠る聖夜かな

裸木の天へ振り上ぐ力瘤

極月の畑に一筋煙立つ

極月の寺に写経の筆をとる

修験者の列なす背なに時雨けり

落柿舎に虚子の一碑や紅葉影  
腹卷きの子安地蔵や堂ぬくし  
冬霧を纏ぎて暮るる峡の里  
大空の虚ろに一花返り花  
と見る間に一村失せて霧襖

美術展出て黄落の径帰る

からかさに宿りて雨の七五三

木の実降る手作りパン屋繁盛す

横すべりするはメタボの木の实独楽

猫呼んで戸締まり終へる十三夜

すれ違ふ猫知らぬ顔十三夜  
十三夜煙吐かざる煙突に  
色変へぬ松駈け抜けて子等元氣  
どんぐりをベンチに並べ子ら遊ぶ  
秋澄むや真珠筏の海なぎて

幾筋も立つ田じまいの煙かな

峡の日のいま届きたる薄紅葉

吟行の余録夕餉の栗の飯

田じまいの煙に燻る山家かな

と見る間に秋天埋むひつじ雲

蔓しごきたる手に零余子三つ四つ

ただ無為に佇みをりし虫の闇

敬老日小さき手もて肩叩き

爽やかや寝返り出来し児の笑顔

道曲がるたび楽変はる虫の闇

羊群の寝そべる牧の風は秋  
海に立つ風力発電風白し  
よく成りてゴーヤカーテン窓涼し  
日盛りや遅れ癖なる鳩時計  
キャンプより遅しき笑み持ち帰る

子の数と同じ世話役神輿行く  
厄除けの鈴振りかざし巫女涼し  
兄妹喧嘩で幕があく夏休み  
初蝉の一声空耳にはあらず  
山寺のしじまを破り牛蛙



夕暮れの谷間に合歡の花明かり  
母の忌や遺愛の合歡の花開く  
糸結び覚え七夕笹飾る  
昏れ残る彩は水際の花菖蒲  
海沿ひに続く鉄路や月見草

追ひついて相合い傘や合歡の花  
花苗のあまりを貰ふ梅雨晴間  
かな文字を描くごとくに恋螢  
星空にまぎれて消えし螢かな  
本堂の軒に樋なし走り梅雨

女生徒の弾ける笑ひ更衣  
堂涼し豊かに笑まふ伎芸天  
故郷の匂ひの新茶とどきけり  
燕来る維新息づく古町に  
瀬の楽に和して遠音の河鹿笛

参道の樹下はさながら著莪浄土  
囀りの天洩るごとくにぶな林  
若葉道抜けて港の見える丘  
一輪車少女がつかむ春の風  
泳ぐごとと揺るる水面の幟影

ボール蹴る子等に広場の花吹雪

田一枚紫雲英浄土や峽の里

園児らの黄色ひ声や燕來る

春の鴨お堀の波にたゆたひぬ

ワイパーもいまや必死の春嵐

片脚を校門に立つ春の虹  
こうのとり飛来す里に風光る  
釈迦院の寂し庵や竹の秋  
春耕の土塊付けて夫歸る  
電線に遠見の烏春田打つ

小流れにラインダンスや踊り子草

春宵の空にしるけき星ひとつ

牧羊の群れて春泥まみれなる

高鳴りて瀬を洗ふ水温みけり

雛街道俳句を添へし絵も飾る

ぼんぼりを灯して雛を納めけり

青き踏む車椅子より降り立ちて

手作りのお手玉もまた雛調度

早春の風が頬刺すダム湖畔

春炬燵走り書きなる置き手紙



早春の翠黛しるき遠嶺かな

畑のもの洗ふ水桶厚氷

車椅子押すも押さるも着ぶくれて

小流れの奏でる汀下萌ゆる

こし方の佳きも悪しきも札納む

縫初の針軽やかに布走る

炭をつぐ僧侶なかなか俳句通

ケンケンの丸の大小路地の春

一筋の紅引くごとく寒夕焼

父と子の手を往き来せり風の糸

と見る間に山白変す吹雪かな  
異国より届くメールの賀状かな  
シリウスの青さいや増す霜夜かな  
引き戸より猫の手が出て隙間風  
病み抜けし人をかこみて納め句座

見え初めし嬰に灯点す聖樹かな  
スケツチも添へし句帳や紅葉狩  
羅漢どちみなお揃ひの毛糸帽  
村時雨観音堂に宿りもす  
夕日射す軒に連なる柿すだれ

小鳥来てゐるらし猫の鈴がなる

猫通る下段を空けて障子貼る

重し石撫でて末社の秋惜しむ

パラグライダー 発進す紅葉山

枝折り戸に萩こぼるるはやむを得ず

スキップの出来る子出来ぬ子秋高し

団栗が溢るる吾子の宝箱

運針の指一と休めちちろ鳴く

大聖堂のマリアの像の笑みさやか

白壁の土蔵に沿ひて秋桜

句碑に降る木の实ならばと拾ひもす

ちよとお茶のつもりが秋の暮早し

鼻欠けし地蔵の顔に里時雨

ほつほつと釣り人並ぶダムの秋

間引き菜を夫がさし出す勝手口

俯瞰する峽の集落秋澄める  
縫ひ物の手もはかどるや夜の秋  
仰向けに猫の寝てゐる残暑かな  
鬼灯を鳴らす小さき齒を立てて  
緑陰やいずくともなく風通ふ



ケアハウス大夕焼に包まるる  
出迎へは青田風なり無人駅  
節水と貼り紙のあり墓洗ふ  
かなかなや水音絶へぬ神の森  
ひまわりの燃えて漁港の昼静か

母の忌を修す夏書の墨の匂ふ

夏霧の山壁撫でて流れけり

あちこちにたつ泥神楽蛸蚪群るる

夜濯や思い出多き旅衣

線描の彫りの涼しき磨崖仏

白南風や漁港に隣る一末社

わが視線わかりて毛虫動かざる

梅雨空に燃へ続けをる平和の灯

尾道は坂多き街枇杷熟るる



# 定例句会入選句

閻王のまつげにあらず春の塵

御仏の正面に座し春愁ふ

初髪の娘ら匂ひける朝かな

予定表パスはやむ無し風邪に伏す

裸木のグチヨキパーと仁王立つ

寒あやめ玉の日和をことほげり

裏白の風にダンスをするごとく

草紅葉石仏多き能勢の里

法話聞きつつ句作しぬ彼岸寺

一陣の滝風木々を揺らしけり

登山道譲りあひては相会釈

山の影映して青田昏れなんと

晩鐘のごとくに峡の遠蛙

一斉に駆け出す風の竹落葉

天降るごと浴びる新緑鳥語また



手をつなぐ試歩の二人に花万朶  
自づから序列をなして鴨進む  
初雪がどか雪となり屋根悲鳴  
休耕田占領したるあわだち草  
かがみこみ句碑よむ肩に菥こぼる

句碑めぐり寺苑の秋を聞きにけり

セブ島の海を再現館涼し

打楽器のごと屋根を打つ夕立かな

嶮磴に仰ぐ青葉の甲山

兵士らの墓碑の辺に草芳しき

寺隅にもてなしのごと福火焚く

閻王と眼の合ひてより足すくむ

風花の横走りせる車窓かな

うろこ雲貫かんとす摩天楼

太公望女も紛る池小春

牛蛙一と声句座の和みけり  
瀬の風に定家葛の匂ひけり  
尺取の一人をどり糸の先  
若楓山湖に影の揺れやまず  
お御足にすぎる老婆や涅槃変

一病の機嫌とりつつつ落葉搔く

飛び交ひて鶉騒がしき甌岩

小春日や岩のパワーを掌に

由緒書読む間も落葉降りやまず

小鳥来るおしやべりの輪のひろがりて

道草の物入れとなる麦わら帽

親つばめ分け隔てなく餌を与ふ

黴の書をさらして父を偲びけり

麦秋のまつただ中や新幹線

山の駅夜目にも白き栗の花

年長の押す乳母車風薫る

戸を開けて夜遊びの猫呼び入るる

食ひ初めの膳に初生りいちごかな

子雀の出入り自由やあひる小屋

下萌ゆるつかまり立ちの出来し子に

元気よく「ハイ」と答へて卒園す

春一番スカート押え髪押へ

ガイドする手話の指先風光る

陋巷の東風に高舞ふ芥かな

手作りの雛それぞれに個性あり



下萌やおもちやのスコップ並びる

ウエディングドレス聖樹のウインドに

冬雲を抜け出して飛機着陸す

柿一つ残し大空暮れなんと

今年米湯立の釜へ投げ入れる

口開けし通草をさげて句座の友  
さはやかや植木鋏のリズムまた  
下校子のカバンが並ぶ葛の土手  
戻り梅雨組みし足場もそのままに  
駅員の手すさびならめ豆の花

鯉はねし波紋に揺らぐ落花屑

達筆と見えし吉書も灰となる

寒禽の声良くひびく神の森

園児らの黄色い声や吉書揚ぐ

百態の兔配して庭小春

苦吟する我にエールやあたたかし

万葉の碑に佇めば小鳥来る

甲山招き寄せある尾花かな

撫子の一本凜と歌碑に添ふ

一水に沿ひて燃えある曼珠沙華

柿紅葉同じ模様はなかりけり

朝涼やテーブルクロスは伊勢木綿

葉づたひに光移らふ初螢

スキップの子が見え隠れ白日傘

麦秋や滋賀の山々低きかな

森の如松下亭の青葉闇

バラの園伏し目に祈るアンネ像

花虻を屈伸運動して除ける

丘を占む風力発電風光る

百度踏む媪に宮の梅固し

初笑ひ百面相の嬰の顔

和太鼓の一打が合図吉書揚げ

ゆりかもめ群舞して橋越へゆけり

蔵人のぞうりに格差身にぞ入む

井守の尾消えて溝そば揺れ残る

風切つて走るジヨギング草紅葉

近隣に独居人増ゆ敬老日

異な楽は外来種かも虫すだく

一末寺村総出なる施餓鬼かな

宿題の子らが占めたる夏座敷



流星を語る子の瞳に星宿る

星流れ一村包む深き闇

岩崖の隙間隙間にすみれ咲く

奥の院まで足延ばし春惜しむ

春愁や鳥形埴輪のうつろな目

草萌ゆる大地を蹴つて太極拳

遠足の子とおしやべりす吟行子

文塚にまだ新しき落椿

汲み上ぐる釣瓶に春の水あふれ

鳶の輪の下にひねもす耕せり

肩車風船空に泳がせて  
舂して早春の山削る音  
得手の娘と不得手の母と毛糸編む  
探鳥のレンズ合はす手悴めり  
山荘の銀座通りを避暑散歩

風涼し水郷巡る櫂の音

夜を濯ぐ腕白坊主寝つかせて

風化して読めぬ碑蛇の衣

火ばさみに捕へし百足逃げにけり

対岸にクレーン林立雲の峰

でで虫に名前を付けて子ら遊ぶ

新緑に閉じ込められし山の寺

竹の秋獣害かこつ老農夫

新緑に閉じ込められし山の寺

竹の秋獣害かこつ老農夫



吟行句会入選句

堰落つる水音も里の秋の声  
相寄りておしやべりしては花野ゆく  
延べし手の上へ落ちたる椿かな  
招霊や源氏ゆかりの地に繁る  
結界の解かれし寺庭すみれ咲く



相聞のごと向きあふて落椿  
四つ目垣お気に入らし赤とんぼ  
小鳥来る千手を翳す大樟に  
丁寧糸菊ほぐす主かな  
囀りの樹下に行厨ひらきけり

一陣の風にひれふす若楓  
譲りあふ歩板の狭し花菖蒲  
風倒木洞に宿りて著莪白し  
婦人部の店繁盛す村祭  
玄室に響くガイドの声涼し

揚羽蝶寺領を案内するごとし

セコイヤの鉾をのみこむ雲の峰

山裾に金色映ゆは竹の秋

千本の牡丹に佇つ大師像

尖塔に銀の十字架木の芽雨

と見こう見屋根に物見や梅雨鴉

雨粒を珠とちりばめ若楓

仰ぎ見るバルーンのような紅葉山

弁天の胸に色射す紅葉影

おごそかや湯立の釜に今年米

行厨の樂し野菊の咲く丘に  
手に当たる喜雨の一滴すぐに消ゆ  
堰音の絶えず螢の闇深し  
まなかひに陵見ゆる丘涼し  
遅刻して気が急くばかり道薄暑

下閘を水馳せてゆく水路閣

遠望の五山うつすら夏霞

山門をくぐりて仰ぐ懸り藤

法若葉慈母観音を要とす

観音のさしのべし手に若葉雨

風光る船銀座なる須磨明石  
干されたる魚網に絡む桜貝  
そぞろ歩のふるさと小径下萌ゆる  
猪の罨風倒木に隣りけり  
寒々と廃屋残る行者道

寒林の中も郵便配達区

春泥の轍ぐちやぐちや網模様

祇王寺の扉にたまる散紅葉

温室にハロウィン人形飾らるる

足湯して秋思うべなふ心旅



日矢差して霧の晴れゆく茅渟の海  
裏山は竹の春なる法隆寺  
勤勉の碑に佇めば樹下涼し  
磊々を好みて遊ぶ川とんぼ  
投句所もありて賑ふ花の道

列なして並ぶ屋台や花堤  
訪へば鴨居の上に紙雛

女郎花供花ともなりて女塚

池の鯉寄りては離れ冬日浴ぶ

彩窓の天使春日に舞ひにけり

たく像に届く春日の触るるごと

堂縁に憩へと揺らぐ若楓

山法師真下の句碑を濡らさざる

夏霧の静かに川面なでてゆく

宿庭の萤火われを歓迎す

深閑と千年杉の宮涼し

蟻地獄小さき御堂を守るごと

激つ瀬の同音異語や出水川

万緑の底ひを進むバスの旅

滝音を運びきたりし風涼し

大噴水沖ゆく船は水平に  
亀甲の石垣涼し離宮道  
奥見えぬ間歩の入口落椿  
磐石に彫られて涼し観世音  
顔伏せて悲しむ猫や涅槃絵図

水子仏並ぶ頭上に雪帽子

公園に独りぼつちや雪だるま

観音の御手指す方に笹子鳴く

後足宙にもがきて鴨潜る

ビロードのごともくれんの太芽かな

火吹竹肺全開に吹きにけり

あめんぼう群れて夕日を散らしけり

案山子とも人ともつかず夜の明くる

明日香路連なり進む秋日傘

目まとひを払ひ会釈を交す野路

ハイカーに手を振る明日香野路の秋

曼珠沙華供花に挿されし石舞台

加茂川の中州を渡る花菜風

温室の狭しと占むる奇樹珍樹